

upopo newa rimse

唄と踊り—アイヌ文化伝承の今

文化は担い手に寄り添いつつ変化していく。自らのルーツを探す、アイヌの若者たちは、途絶えた先人の文化を再解釈や再現することによって受け継ごうとしている。



Team Nikaop (チーム ニカオプ)
2011年8月21日 北海道二風谷 第42回チツサンケ祭りにて

アイヌ民族に伝わる唄や踊りの伝承

幼かったころの、かすかな記憶が残っている。夜、子どもたちが寝付いた親戚の家で、大人たちは大笑いしながら手拍子で歌い踊っていた。立っている人はふたつに折った座布団を股に挟みビョンビョン前後に跳ねていた。大人になり、あれは何の踊りだったのだろうと調べてみた。その地域で酒宴の余興としてよく歌われていたアイヌ語の唄で、ちよつとエッチな歌詞のものがあった。きつとこれに違いない。

わたしの暮らしのなかで、アイヌの唄や踊りは身近ではなかった。だが大人たちは密かにその世界を楽しんでいたのである。

親から子へ、または自然に聞き覚え伝承してきたであろうアイヌの唄や踊り。しかしいつからか差別を恐れ、アイヌ文化を次世代へつなぐことをやめる者が増えていった。わたしの名はアイヌ語でもあるのだが、身内から可哀想にといわれる時代になってしまっていたのだ。

現在、唄・踊りは、北海道各地域に存在する伝承保存会で継承する場合が多い。わたし自身は、家族でも保存会でもない、故郷から遠く離れた東京で活動する、アイヌの若者たちによるグループの活動をとおして

学び得たのだった。

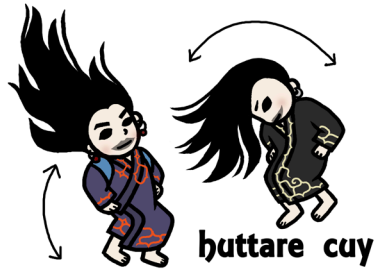
対照的なふたつのグループ

わたしが上京し、すぐ所属したのが、AINU REBELS (抵抗する者たち) だった(二〇〇六〜二〇〇九年)。アイヌ文化を学ぶため、首都圏近郊に住む若いアイヌ十数名で結成したグループである。「わたしはアイヌ」宣言、J-POP曲のアイヌ語化、アイヌの詩人が残した詩を楽曲化。差別、酒、貧困などアイヌのマイナスイメージを払拭するため、現代音楽の要素や映像を取り入れ、アイヌ民族のあらたな表現を模索した。アイヌ女性の象徴的な風習、シヌイエ(入墨)の再現などは、メンバーたちの意識をも変えていった。

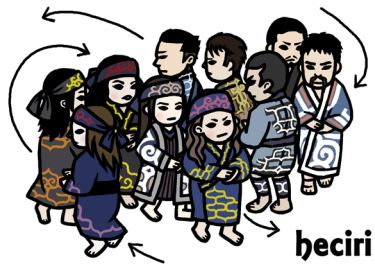
その後、二〇〇九年からはTeam Nikaop (木の実) に所属している。古式舞踊の復元事業にかかわった、おもに北海道在住のアイヌ十数名で結成されている。古い映像や音声記録を元に、現在伝承されていな

いものを再現する活動をおこなう。踊り手の少なかったタブカラ(踏舞)の実演者が増えた他、樺太アイヌの記録にあったヘチリ(輪踊)は大変珍しく、グループの看板演目である。後に唄、踊りだけでなく、語りの要素も強めていった。

アイヌ文化というと、古い過去のものと思われがちだが、時代とともに我々も変化しているのだということもAINU REBELSで学んだ。アイヌと沖縄の祭、屠場の若者たちとの交流、海外の先住民族や日本国内のミックスルーツの若者たちとのコラボを通じて、さまざまなマイノリティー問題にも目を向けた。活動初期のころ、個人的な迷いから「わたしはアイヌ」と宣言するパフォーマンスを見送ったことがある。無意識に避けてきた自分のなかの問題にも初めて気づかされた。Team Nikaopでは、残された記録や資料をつなぎ合せ組立て、先人はこうだったであろうというものを想像し、形にする難し



AINU REBELS (アイヌレブルズ) によるフックレチュイ。松の木の揺れを模した女性による踊り。頭を激しく振る心臓比べの踊りを、現代楽曲と演出にて表現



Team Nikaop (チーム ニカオプ) が再現したヘチリ。記録にあった樺太アイヌの輪踊り。ひとつの輪がふたつに分かれ再びひとつとなり、その際逆回転となる(上下ともイラスト・sayo)

さと面白さがあった。模索しながら練習を重ね、ついに完成したときの感動は大きい。復活した古式舞踊はかけがえない財産である。この二グループの存在はとても面白い。かたやアイヌ民族を語るうえで重要な、北海道という土地を飛び出し東京で活動。一方は土着の北海道。現代的な表現と、過去に存在したものの再現。

どちらも、各地でバラバラだった若いアイヌが集結し、自分との違いや共通点、多様なアイヌの現状を互いに知り得たことは大きい。アイヌ同士であるという連帯感、安心感から、ステージ外で自然発生的に唄や踊りが始まると、あの夜、幼いわたしが見た光景のように思えた。

伝える姿

今でも表立った活動をすればアイヌ差別問題はつきまとう。当時、AINU REBELSによる表現は東京だからできたのだといわれた。しかし今、北海道でアイヌとして活動しているユニットやグループが多く存在する。ここ数年、空前のブームかと思うほど増えた。アイヌ民族であることを誇れる強いアイヌが増えたのではないだろうか。

アイヌ語を学ぶ若者も増えている。親になり、我が子にアイヌ語の名前をつける者も多い。二〜三歳の子が親をまね、アイヌ語の唄を歌い、手拍子しながら踊りだす。元メンバーの子どもだ。こうして伝承されてゆくアイヌ文化が今、わたしの目の前にある。